

日本人のコミュニケーション・スタイルについての一考察

— 会話の曖昧性 —

大野 佳代子 (英文学)

はじめに

「異文化理解」という言葉が、小学校教育の場でも聞かれるようになって久しいが、現在では多くの小学校で、「国際理解」或いは「異文化理解」に重点を置いた授業が「英語活動」の時間として全学的に実施されている。¹⁾ 言うまでもなく、異文化を理解することは大切なことである。しかしそれは同時に自国の文化を見つめ直すことでもある。

文化にはさまざまな定義があるが、筆者はこれを「生活様式の総体」として捉えたい。精神と行動は文化を構成する要素の一部であるが、コミュニケーションを行動の一種と考えるとき、我々が日常的に行っているコミュニケーションには、価値観や思考形式を含む日本人としての特性が色濃く投影されているものと思われる。小学校或いは幼稚園の頃から、「異文化理解」を念頭においた教育を受けるようになってきている今の子供達と、「異文化理解」などとは無縁の環境で育った年輩の人たちとの間には、いずれコミュニケーション・スタイルにおいても違いが出てくるであろうと思われる。

本稿では日本人の、言語によるコミュニケーションについて考える。日本人の会話には、しばしば曖昧性が認められると言われる。曖昧でぼかした表現を好むという日本人の傾向については、中山 (1988) によれば、既にポルトガルの宣教師ルイス・フロイスが1585年に言及しているという。日本人のコミュニケーション・スタイルにしばしば認められる、この曖昧性を手がかりにして、日本人の意識と行動のパターンについて考察する。

I) 日本人の意識の急速な変化

日本人の意識は急速に変化しつつあると実感することが、近年多い。特に最近は何か事件が起きるたびに、ますますその感を強くする。数十年前、「新人類」という言葉がマスコミに出現した。発想が旧来の日本人のパターンとは異なるということで、格好のニュース素材としてマスコミ等が盛んに書き立てたのであるが、往年の「新人類」もいまや顔色なしと思われるほど、若者たちの言動の変化は急激かつ加速度的であるように感じられる。

第二次世界大戦を一つの区切りとして、日本人の生活スタイルは大きく変わっていった。戦後50年間の日本人の意識と行動のパターンを概観するとき、衣・食・住といった生活面での様々な変革のなかにあって、急速に変化していく部分と変わらない部分とが見受けられるように思う。さらに、今まで変わらなかった部分も、今後変わっていく可能性は大にある。

例えば、住環境を見てみよう。この半世紀の間に日本人の住環境は甚だしく変化した。渡辺 (1997) によれば、住イメージのアメリカ化が始まったのは80年代後半だという。これは50年代にティーン・エイジであった人々が中年に達したためで、彼らがいざ自分で家を建てようとしたときに、少年期に映画やテレビで見た夢と憧れのアメリカン・ホームを少しでも実現したいと望んだ結果なのだそう。今では素晴らしい欧米風の外観の家々が建ち並ぶ風景は当たり前になっており、それどころか昔からの村落といった佇まいの所にも、それらが点在して見られるようになっている。多目的利用を容易にしていた畳空間は、限定利用のフローリング空間に取って代われ、子供部屋には鍵がかかるようになって

た。

このような住環境の変化が及ぼす影響は、単に物理的な面にとどまらず、精神面にも大きく作用したと思われる。卓袱台が家の中から姿を消したことが象徴するように、家はもはや家族の団らん場ではなくなりつつあると言っても過言ではないかもしれぬ。テレビ・冷蔵庫など、かつては一家に一台であった物が、今では子供部屋にもそれぞれ置いてあったりする。日々の暮らしの中で子供は、親の厳しい監視の目或いは深い思いやりの心の届かないところで、好き勝手に振る舞うことが助長されている。自分以外の人間に対する気遣いなど全くする必要がない環境に置かれていれば、コミュニケーションの仕方も自ずから変わってくるのではないか。

長幼の序列とともに厳然と機能していた家父長制が崩れかけ、家の中での人間関係も変わりつつある。親子・家族というのは社会の基本単位であるが、その基本の部分が変わっていくとすれば、社会全体が変わらないはずがない。

NHK世論調査部が1973年以降5年毎に実施してきた、日本人の意識調査結果によれば、20世紀最後の四半世紀の間に、人間関係に対する日本人の意識は大きく変化したことが分かる。いずれの調査でも対象となっているのは、16才以上の無作為に選んだ男女5400人であるが、調査の回を重ねる毎に、母集団における戦前・戦中世代の占める割合が減少し、その分だけ戦無世代²⁾が増加してきている。この四半世紀における人間関係に対する意識の変化には、この世代交代が大きく寄与していることが明らかとなった。

調査では人間関係の場を大きく三つに分けて、①「親戚」②「近隣」③「職場の同僚」と設定し、それぞれの場での相手とのつき合い方について、次の三つのうちどれを最も望ましいと考えるかを問うている。

- (イ) なにかにつけ、相談したり助け合えるような、濃密な全面的なつき合い。
- (ロ) 礼を失さない程度の形式的なつき合い。
- (ハ) 何事もほどほどにという、部分的なつ

き合い。

調査結果によると、近隣とのつき合い及び親戚とのつき合いにおいて、(ロ)の形式的なつき合いを望む人は、初回以降のいつの調査でも最も少なかったのであるが、それでもこの25年間に「近隣」では15%から23%に、「親戚」では8%から17%にというように、その割合が漸増してきた。また、73年の第一回調査では、「親戚」及び「職場」においては、(イ)の全面的なつき合いを望む人がそれぞれ51%、59%と過半数を占め最多であったが、98年の調査ではともに36%、38%とかなり減少している。特に「親戚」では(ハ)の部分的なつき合いを望む人が46%と最多になり、「職場」でも既に93年の調査時から(イ)と(ハ)の拮抗状態が続いている。

四半世紀を経て、日本人の人間関係に関する意識は大きく変わった。①「親戚」②「近隣」③「職場の同僚」という三つの場において、いずれの場でも、以前のように濃密なつき合いを望ましいとする人は減少し、その代わりに、つき合いはほどほどでよいとか、形式的でよいのだと考える人が圧倒的に増えたのだ。「ほどほど」と「形式的」を合わせると、「近隣」では76%、「親戚」では63%にも達している。

一日の活動時間の大半を占めしかも生活の糧を得る基盤となっている職場でのつき合いに関しては、従来日本人は誰しも親戚つき合い以上に、人間関係に心を砕き入念な配慮を心掛けてきたはずである。しかし「職場」ですら98年の調査では、全面的なつき合いを望む人が「部分的」より多かったのは戦前・戦中世代だけで、他の世代では「部分的」を望むの方が断然多かった。

今後社会において戦無世代の占める割合が増加するにつれて、あらゆる場における日本人の人間関係に対する意識は、「ほどほどに」という志向がますます強くなっていくことと思われる。

例えば近隣とのつき合いで或いは職場でのつき合いで、かつて日本人の多くはどのような心遣いをしていたのであろうか。「部分的

或いは「形式的」な付き合い方であればおそらく不必要であるかもしれぬ、様々な気配りをしていたはずである。

II) 潤滑油としての挨拶言葉

「ホンネ」と「タテマエ」という日本語が象徴するように、他者を傷つけないように思いやる心を、日本人は古来大切にしてきた。「世間体」を気にし、そのために敢えて己を殺すという振る舞いも、ごく当たり前のこととして行ってきた。

日本人が日常的によく使う挨拶表現の中には、人間関係を円滑にするためという意図でのみ用いられ、実質的な意味を持たないものが多くある。いわば、「枕詞」的役割を担った慣用表現である。ときには心にもないことを、単にお世辞・お愛想として言うこともある。「つまらないものですが」とか、「何もありませんが」とかは、誰かに物をあげたり、誰かをもてなしたりするときの常套句として、あまりにも使い古された例であるが、そのほかのケースをいくつか挙げてみよう。

II-1 「いつもお世話になっております」

本当に「お世話になっている」かどうかに関係なく、用いられることの多い表現である。時には、逆に「お世話をしている」側の人間が、枕詞として儀礼的に口にしたりもする。例えば、電話をかけたときに、応対した初対面の相手に対して：「わたくし、〇〇と申します。いつもお世話になっております。△△さん、おいででしょうか」。逆に、電話を受けたときに、家人の勤務先からであったりすると、相手が誰であるか特定出来なくても、取りあえず「いつもお世話になっております」と言うことが多い。この場合、本当にお世話になっているかどうかは問題としない。

II-2 「大変ですね」

これも非常に曖昧な言葉である。いろんな場面で、それぞれに異なった意味合いで用いられる表現である。例えば、職場で別の部署に所属する知人Bが一人で重そうな荷物を運んでおり、偶々廊下で行き会ったAがBに対して「大変ですね」と声をかけたとする。こ

のたった一言は、どのように解釈したらよいのであろうか。解釈の仕方によっては、Aに対するBの返答も異なってくるのではないか。考えられる解釈は次のように、二通りあろう。①Aは単にBの労をねぎらっただけ。②もっと別の深い意味が込められている。

このような場面での「大変ですね」は通常、表面的には①の意味である。そしてこれに対してBが、「ええ、結構大変なんですよ。意外に重くて。」とでも応えれば、別にどうということはない。AとBがどんな間柄であろうと、また周囲に誰が居合わせようと、少しも不自然ではない、当たり前の会話になる。しかし、もう一つの、②の場合はどうであろう。例えばAは内心、B一人に運ばせて知らん顔をしているBの同僚たちに対して憤慨し、Bを気の毒だと思っているのかもしれない。

つまり、「大変ですね」という日本語表現には、「何が」大変なのかという肝心の部分が隠されているのである。①の場合なら、「重くて、大変ですね」であり、②の場合なら、「一人でやるなんて、大変ですね。皆でやれば簡単なのに。」ということになる。②には、「重くて、大変なこと」をやっているBに対する労いだけでなく、B一人にやらせて知らん顔をしているBの同僚たちに対する非難も込められているのである。

しかし、そのような場合、いくらBに同情していても、Aは自分の心情をストレートにあらわすことはしないであろう。まずは、「大変ですね」と言ってみるのである。そしてBの反応を見る。「大変ですね」の発信者Aの意図が①であろうと②であろうと、受信者Bが①用の無難な返答をした場合は、AとB両者の間は単に行きずりの一過性の関係にとどまる。しかし、Bがこのとき何らかの不満の徴候を見せれば、その後の両者の会話はそれなりの展開をたどることになるだろう。この両者の関係は一挙に親密なものとなることもあり得る。BはAに対して、自分の苦労をよく理解してくれていそうな「いい人だ」と親近感を持ち、更にそれが信頼感にまで発展するかもしれぬ。

直塚(1980)は感謝の気持ちのあらわし方を例に取って、「この間はどうも、ありがとうございました」という日本式謝意表現は、欧米人にとって不可解な事例の一つであることを紹介している。「この間」とは一体いつのことなのか、またそもそも自分が何のことで相手から感謝されているのか、これではさっぱり分からないということなのだ。日本人同士であれば、このような場合、仮に相手が「いつ」の「どんなこと」に言及して謝意を述べているのか見当がつかなくても、それは問題とはならない。相手の謝意に対して取りあえず、「いいえ、こちらこそ」と応えておけば、それでいいのである。いわば、儀式の一つと考えられていると言ってよい。「何のことなのか」どうしても気になるときは、親しい間柄なら、単刀直入に聞けばよいし、そうでない場合には遠回しにそれとなく探りを入れて相手が何のことを言っているのか、聞き出すこともあるであろう。

「大変…」や「この間はどうも…」のように、日本人の会話スタイルには、言及対象を明確にせずに、曖昧なままで会話をスタートさせることがある。特に、「大変ですね」の場合には、発信者は受信者の対応を慎重に見ながら、自分の本当の気持ちを相手に言ってもよいかどうかを、決めなければならない。更なる会話の方向性を慎重に探るために、発信者には自分が発言する前に、「間」が必要になってくることもある。

Ⅲ) 日本語会話における「間」と「察し」

ものごとを婉曲に表現するというのも、他者を気遣う心の表れである。あからさまに言うのは不躰であり、相手を不愉快にさせるのではないかという懸念から、直截な物言いを避けるのである。次の会話には、婉曲表現が多用されている。

Ⅲ-1

A:「まあまあ、〇〇さん。このあいだは、…アレでしたねえ。」

で、…もう、アレですか？」

B:「いやあ、どうも、どうも。アレもアレ

だったでねえ。」

まあ、何とか、…アレですわ。」

A:「で、…今日は、だんなさんが、ゴミだしですか。…ナンですわねえ。」

お嫁さんは、…アレですか？」

B:「いやあ、まあ、…ナンだわね。」

A:「ああ、…、まあ、…アレですわねえ」

B:「いやあ、…、まあ、どうも、どうも」

この会話は、糟糠の妻を亡くしたばかりの夫(B)と、その一家をよく知る近所の人(A)とのものである。「アレ」が多用されている、この類の会話を耳にすることは、稀ではない。旧知の間柄である、ともに60代の2人の間でかわされたこの会話は、事情を知らない者にとっては、おそらくチンプンカンプンであったろう。仮名書きにした部分は、あまり直截に物言いは、相手の心を傷つけるのではないかという配慮から、ひどく婉曲な表現となっている。実際に話者が意図したであろうことを文字化すると、おそらく次のようになる。

Ⅲ-2

A:「まあまあ、〇〇さん。このあいだは、…〈奥さんが亡くなられて、ご愁傷さま〉でしたわねえ。で、…もう、〈奥さんがいないことに慣れました／心の整理ができました〉ですか？」

B:「いやあ、どうも、どうも。(妻)も(長い間)患って、もう危ないと言われていたからわねえ。まあ、何とか、…〈一段落つきました〉ですわ。」

A:「で、…今日は、だんなさんが、ゴミだしですか。…〈奥さんがいなくなると大変〉ですわねえ。お嫁さんは、…〈知らん顔〉ですか？」

B:「いやあ、まあ、…〈嫁も忙しいから、自分のことは自分でやらなければ〉だわね。」

A:「ああ、…、まあ、…〈嫁さんがやってくれないとなると、何もかも自分でやるのは大変〉ですわねえ」

B:「いやあ、…、まあ、どうも、どうも」

ここで(A)により用いられた婉曲表現に

は、意図された真意が2種類ある。妻を亡くして、打ちひしがれているであろう(B)に対する労りからのものと、そういう人にゴミ出しをさせる彼の嫁に対する非難をこめたものである。どちらも、あからさまに言っただけでは、相手をもっと深い悲しみに誘うことになる。そうしないための、配慮から出た言葉遣いであろう。

また、上述の会話には顕著な点として、相手に対する気遣いから生み出された「間」の存在がある。特に、婉曲表現に「非難」がこめられている場合には、その「間」はひどく微妙な意味合いを持つ。(A)としては、相手のおかれた境遇への深い理解と同情を示すことは、誰はばかることなくしてよいのであるが、「(他家の)嫁への非難」となると慎重でなければならぬ。婉曲表現をするだけでなく、必要なだけの「間」を取ることで、相手のホンネを探ろうとするのである。一方、(B)は相手の労りには感謝しながらも、暗にほめかされた「我が家の嫁への非難」に対しては、これもまた「間」を設けることにより、肯定するでもなく否定するでもない微妙な反応をしている。「間」のなかに、発信者も受信者もともに、「以心伝心」或いは「察し」を相手に期待しているとは言えないだろうか。

バーンランド(1973)は、1968年から4年間にわたり日米の大学生を対象として、日本人とアメリカ人のコミュニケーションについて調査した。これは、日本人・アメリカ人それぞれの対人関係の特徴に関する、自己評価と他者による評価という2種類の調査データを基にして、日米両文化の特性をみようとしたものである。意志疎通の特徴をあらわすものとして選ばれた34項目のうち、日本人の意志疎通の特徴をあらわすとして、日本人自身からもアメリカ人からも高ポイントを得た形容詞は、トップが「遠慮をする」(Reserved)であった。2番目以下は、日本人自身による評価では、「改まっている」(Formal)、「黙りがち」(Silent)、「用心深い」(Cautious)であり、アメリカ人から見

た日本人評価では、「改まっている」「用心深い」「つかみどころがない」(Evasive)となっている。この調査結果から浮かび上がってくる日本人の特性は、「より規制された対人接触を好み、自己を表現する場合に、遠慮がちで警戒的になりがちであり、開放的で率直であるよりは、回避的でとらえどころなく沈黙しているほうを好む」³⁾というものであり、自己を強く閉じこめ、それを規制して注意深く表現するのが日本文化のプロフィールであると、著者は言う。

Ⅲ-1の会話には、バーンランドの指摘する日本人の特性が顕著にみられる。これは日本人同士による会話であるが、先にも述べたように事情を知らない者にとっては、何のこともかさっぱり分からない会話に仕上がっている。しかし、当人たちにはこれで必要かつ十分なコミュニケーションとなっているのだ。日本人が会話において、「遠慮」をし「用心深い」のは、①相手に対する気遣いと、②自己保身、という二つの理由によるものと考えられよう。①については既述のとおりであるが、②は要するに自分が傷つかないようにということなのであろう。不用意な発言のために、うっかり対話者の垣根の内側に踏み込んで、相手から憎まれたり疎まれたりすることのないよう、発話に気を配る。

日本人にとっては真実の追求よりも親しみの持てる人間関係の方が重要であり、会話の目指すところは人と人との和であると、バーンランドは言う。彼が引き合いに出している学生のように、他の誰かと正面きって対立することを何よりも恐れたり、同じ意見だということが予め分かっているものでなければ、友人とさえホンネで話すことはむづかしい、と考える日本人は今日でも少なくないと思われる。

日本人の会話スタイルでは発話者は、場合によっては、用いる言葉を選び、発話のタイミングをはかる。そして、「以心伝心」がどれほど成功したか、或いは相手が発話者の意をどれほど「察して」くれたかを、発話後の「間」を慎重にとることによって、見きわめ

ようとする。こうした一連の事が、Ⅲ-1の会話例のように、ほとんど意味不明瞭な言葉遣いによって、しかしごく自然に、行われるのである。

辻村(昭43)は日本文化の基本的特質は「洗練された単純さ」であるとし、この特質が日本文化の伝統の根幹に据えられたのには、禅の影響が極めて大であると述べている。さらに、「以心伝心」というコミュニケーションの形態は、禅的思考様式から生まれたものであり、「以心伝心」は、禅の厳しい修行を通して体得され、自我を脱して自由自在の境地に達して初めて得られるコミュニケーションなのだという。ひとたび「その境地に達すれば、饒舌の自我はなくなり、寡黙のうちに体験の豊富さが合体して、自由自在の驚くべき充実した『洗練された単純さ』がうまれてくるように思われる」⁴⁾と、辻村は述べている。

辞典には「以心伝心」の定義として2種類ある。

- ① (禅宗で)「言葉では説明出来ない深遠・微妙な教理を無言のうちに弟子に伝えること」
- ② (俗)「無言のうちに相手に分からせること」⁵⁾

①は辻村が言うような本来の意味である。しかし現代社会では「以心伝心」はコミュニケーションの一形態として、もっぱら上記の②として日常的に使われていると思われる。「無言のうちに相手に分からせる」ということは視点を変えれば、「無言のうちに相手の言わんとすることを察する」ということにもなる。日本文化の根幹とも深く結びついた「以心伝心」は、「察し」が期待されているという点において、いわば、日本人の「意識と行動」の中核を担うコミュニケーション形態だと考えよう。

IV) 謙遜のストラテジー

西田(1989)は日米間にコミュニケーション・ギャップが生じる一例として、日本人の謙遜・卑下的表現を示し、これに対する日本

人大学生の意見を調査した。それによれば、積極的に良しとして好意的に考える者は0、アメリカ人に対する表現としては不適切であるとして、批判する者が4割であった。しかし、このような謙遜・卑下表現は極めて日本的で、日本人としては当たり前だと考える中立派は6割いたという。この調査は日米間のギャップという視点からのものであったが、もし同じ日本人同士での会話であったなら、このような日本の表現に対する好意派は、もっと多くなるかもしれぬ。

次の会話もよく交わされるもののひとつである。

IV-1

A:「お子さん、大きくなりましたねえ。

しっかりしていらして、お利口そうで、
いいわねえ。羨ましいわ。」

B:「いいえ、ダメなんですよ。5才になりましたけど、身体ばかり大きくて、頭の方は空っぽなんですよ。」

これは子供を連れた母親(B)が、久しぶりに会った知人(A)と交わす会話である。日本人の場合子供をほめられた時に、(B)のような言葉を返す人は非常に多いと思われる。(A)の「しっかりしていて、お利口そうで」という部分は、お世辞である。勿論それをちゃんと心得ていて(B)は、相手の言葉を否定してみせる。このようなとき、たとえ密かに子供のことを自慢に思っていたとしても、「そうなんですよ。本当にウチの子は賢くて、喜んでいるんですよ」などと、心の内をさらけ出すようなことは決してしない。

ところで、上記の会話はこのあとどのように展開するのであろうか。典型的な会話のパターンはおそらく次のようになるであろう。

IV-2

A:「そんなこと、ありませんわよ。ご両親が頭がいいし、しっかりしていらっしゃるから。」

B:「いいえ、とんでもない。ウチなんか、ダメですわ。あなたの方こそ、お子さんがよくお出来になるって、聞いてますわ。本当に、私の方こそ、羨ましいわ」

と、こんな具合に会話は延々と続くかもしれない。両者とも互いに自らを卑下し謙遜してみせ、あくまでも相手をほめようとする。

上記に想定したようなⅣ-2の会話のパターンは、比較的女性に顕著にみられると言う。女性は男性に比べてはるかに相手に気遣いを示す傾向があるらしい。かつてはフルタイムで仕事を持つ女性は少なかった。多くの女性にとって付き合いの範囲は、主として地域の近隣の人々である。一日の大半を家で過ごす女たちにとって、近隣の女たちとの付き合いは大いに心を碎かなければならぬものであったのであろう。

直塚（前記）は「粗茶ですが…」という日本人のよく使う謙譲表現を例にして、日本人の謙譲表現に対して外国人がどのように感じているかを紹介している。最初は戸惑いや苛立ちを感じていた外国人も、日本での生活に慣れて来るに従って、謙譲表現とは一種の儀礼的挨拶なのだと思えるようになることが多いのであるが、なかには偽善的であるとして反発し、不愉快に感じる人も少なくないという。

坂本ナンシーの解釈⁶⁾によれば、日本人の謙譲表現は相手からお世辞をつくり出すエサの働きをしているのではないかということだ。大事な客に粗茶など出すわけがない。それなのにわざわざ、「粗茶ですが…」と言って茶を出されると、客としては一口飲んだ後、「いやいや、冷たくて美味しいお茶ですねえ。」とかなんとか、ホストの謙譲表現を打ち消すような言葉を、どうしても言わなくてはという気にさせられる。「お茶をどうぞ」と言って出されれば、「有り難うございます」と言うだけでよいのだが、「粗茶…」と言われると、「そんなことないですよ」ということを、感謝の気持ちと一緒に伝えなくてはいけない。いわば客はお世辞を言うことを無理強いされた気分になり、不当な義務を負わされたと感じるのだと言うのである。

牧野（1996）は日本人はウチ向き表現とソト向き表現のギャップを作ることを一種の謙譲表現と考えているようだという。ソトの人

にウチの人をほめないどころか逆にけなすという、牧野の言う「屈折した言語行動」を取る日本人は多い。先の子連れの子供の場合、傍らに一緒にいた子供は一体この会話をどう思うであろう。自分のことを「身体だけ大きくて、ダメな、頭の空っぽな子」と、ヨソのおばさんに向かって言っている母親のことを、どう思ったであろうか。もしもその母親が日頃子供に向かって、「〇〇ちゃんはお利口だから、おかあさんは嬉しい」と言っていたとしたら、おそらくその子供の頭は非常に混乱するに違いない。

V) 「ソト」 向けの言葉

日本社会では子供は幼いときから、自分の周囲の大人の間で交わされる会話を通して、「ウチ」向けの言葉と「ソト」向けの言葉が存在し、その両者を臨機応変に使い分けるのだということを知る。これが「ホンネ」と「タテマエ」にも通じることになるのであるが、例えば親に対する呼称もその一つであろう。幼児期からずっと母親を「ママ」と呼んできた子供が、幼稚園入園を目前に控えたある日を境に、或いは小学校入学を契機に「おかあさん」と呼ぶようになったという話はよく聞く。ずっと「ママ」と呼んでいた母親に向かって「おかあさん」と呼びかけることで、その子の内面で何かが変わるのではないか。更に長ずれば、その呼称は家庭内のみでの使用に留まり、家庭外では「母」という呼称を用いるようになる。もっとも最近では人前でも臆面もなく、自分の親のことを「おかあさんが…」などと言う若者が増えてきたようであるが。

「ソト」向けの言葉とは基本的に、①自分のことは卑下し謙遜する、②相手のことを賞賛する、という二点に凝縮されるのではないか。

ブラウンとレビンソンによれば、人は誰でも基本的に二つの願望を持っており、これらの願望を満足させるために我々は丁寧表現を用いるのだという。二つの願望とは、井上（1999）の言葉を借りれば、「人に邪魔された

くない、何かを強制されたくないという願望、つまり自らの独立性を保ちたいという願望」と「人によく思われたい、人と仲良くしてもらいたいという願望、つまり人との連帯を得たいという願望」である。この二つの丁寧さは基本的にどの文化でも見られる普遍的なものだというのがブラウンとレビンソンの主張であるが、その現れ方が実は異文化間のミスコミュニケーションの一つの要因になり得るのではないかと、井上は指摘する。彼が一例として取り上げたのは、日本語の代表的な挨拶表現の一つである、「よろしくお願ひします」である。これは相手への依頼を現す表現であり、直塚(前記)の調査によれば、このように言われると英米人の場合、非常に不快だと感じる者が多いという。それは、「お願ひ」されるといやでもそれに応えなければならない、つまり自分の「独立の願望」が脅かされるために、不快感を持つということになるのであろう。しかし、依頼する側と依頼される側が日本人同士の場合だと、状況は異なってくる。「よろしくお願ひします」と丁寧に挨拶されて、そのことで不快に思う日本人はおそらくいないからである。

「よろしくお願ひします」というのは日本人にとっては、①自分のことは卑下し謙遜する、それと同時に、②相手のことを賞賛する、という二つの機能を立派に果たしている「ソト」向けの言葉なのだ。

自分が「心にもないことを言っている」場合が如何に多いか、よく気を付けてみると、驚くほどである。我々は日常の生活の中で場面毎に、様々な常套句を使いわけているのであるが、そのいずれの場合でも実は無意識のうちに相手から返ってくる言葉を予め想定している。特にほめ言葉を発する場合は、両者の間で交わされるやり取りには一定のパターンというものがあるようだ。「A」と言ってほめる場合、発信者は相手に対して恐らく何らかの打ち消しの言葉「B」を言うであろうと想定しつつ、言う。そして予想通り返ってきた「B」に対して今度は「C」と言う。この場合も次に多分「D」という返事が

返ってくるであろうと想定している。このようにして予測可能なある一定の展開をみせながら、会話はすすんでいく。

小林(1998)は、この日本人によくある会話のパターンがアメリカ人との会話で通用せず、話の接ぎ穂に困り当惑したという体験を紹介している。彼女は偶々知り合った初老のアメリカ人男性が語る事業の成功話に耳を傾けた後、お愛想のつもりで次のように言った。"You really practiced what you preached. You carried out the 'American Dream.' Your brave decision has borne fruit." (「あなたはご自分の信念を実行されて、アメリカンドリームを実現なさったんですね。あなたが英断なさったから、そのような成功を収められたんですね」)⁷⁾ 当然彼女はこのとき相手は何らかの打ち消しの言葉を発するものと予想し、それに対応する次の言葉を頭の中で模索していた。ところが、相手の返事は予想を裏切るものであった。彼は彼女の言葉を全面的に肯定したうえに、更に次のような自画自賛する言葉をつけ加えたという。"Well, on top of that, I'm a shrewd judge of situations. Rash decision won't lead to success." (「そうなんですよ。それだけじゃない。私の状況判断は的確なんですよ。そうでなければ、成功はしませんからねえ。」)

相手が日本人だったらこの場合、小林が予想したように、会話は次のような展開をしたであろう。小林のお世辞に対して相手が「いや、いや、たまたま巧くいったんです。私は運が良かっただけですよ。」と、謙遜してみせる。そこで今度は小林が相手の謙遜を否定し、「運なんかじゃありませんよ。貴方の実力ですよ。」と、もう一段相手を持ち上げる。このような日本式展開は相手の自尊心を大いに満足させることであろう。しかし、もし会話がこのように展開しなかったら、どうであろう。話者双方の心に何が残るであろうか。

小林はアメリカ留学中に、日本人同士の会話とはまったく異なった展開をする、アメリカ人とのこのような会話をたびたび経験し、

困惑したという。こちらがお世辞のつもりで言った言葉に対し、相手が即座に肯定し、更に自信満々の態度で誇らしげに己の優秀さを言い立てたりしたら、鼻白む思いがするであろう。時には嫌悪感すら抱くこともあるかもしれない。

或いは逆に、相手のほめ言葉に対して謙遜してみせたとき、自分の発した言葉が相手に額面通りに受け取られてしまったら、やはり気分を害することだろう。「そうなのか。偶々運が良かっただけなのか。この人は、本当は実力ないんだ。」と、相手が信じてしまったら、その誤解を解くには一体どうしたらよいのであろう。

筆者がかつてイギリスで老夫婦の家庭にホームステイしたときのことである。暖炉の上に飾ってあった、孫らしき若い青年の写真が目にとまった。話題のきっかけとして丁度いいと思い、早速大学生らしいその写真の青年のことを口にしたのであるが、返ってきた言葉は思いがけないものであった。

V-1

筆者：「お孫さんですか？大学生ですか。賢そうな青年ですね。」

相手：「いいえ、あなた、孫は本当に賢いんですよ」

"Is this your grandson? He's a university student, isn't he? He looks clever."

"No. He is clever!"

彼女は「賢そうなお孫さんですね」というお世辞に対して、日本人であったら当然取るような謙遜的態度を取らなかった。それどころか、「賢そうに見えるのではなく、実際に賢いのだ」と、むしろ誇らしげに孫について語りだした。

自分がほめられたときだけでなく、自分の身内の者（配偶者や子供、或いは兄妹など）をほめられたときにも、日本人は謙遜的な対応をするのが一般的である。これは「ウチ」と「ソト」の使い分けを、日本人はしているということなのであろう。

おわりに

英語には、はっきりと言明することでしかコミュニケーションできないという、きわめて論理的な性格があると言われる。加えて英米人社会には、たとえ親子・夫婦の間柄でも独立性と個人主義を重視するという伝統がある。そのような社会では、誠実さが自分に向けられているのだと鍋倉（1990）は言う。それに対して日本人の場合、誠実さとは、あくまでも他者に対して向けられるものなのである。日本人社会では先述のように「ウチ」と「ソト」を区別して考える伝統があり、言及対象が親子・夫婦といった「身内」である場合、「ソト」に対しては「ウチ」として自分と一体化して、発話してしまう傾向がある。個々の人間の自主性・独立性など消し飛んでしまうことが多い。「ソト」を気にするあまり、「ウチ」に対しては配慮が後回しになったりする。

一方、日本人の会話にはこれまで見てきたように、しばしば曖昧性が認められる。中山（前記）は、相対的にみれば日本人は対人恐怖的心性が強いと思われるとし、臨床社会心理学の視点から、この仮説に立って日本人の「ほかし」コミュニケーションを解明しようとした。彼は「ほかし」コミュニケーションは、対人恐怖的心性の一因子である「過剰配慮」が働いた結果生じたものであり、日本人のコミュニケーションの基本は「相互の一体感を得るために自他の感情の動きに最大限の配慮を払い、お互いの考え方なり感情なりを出来るだけ一致させるよう双方が歩み寄る形が原則となる」⁸⁾としている。また、この配慮の対象となるのは、他者と自分の双方であり、このような「過剰配慮」が働いた結果、「察し」の能力が発達したと思われると言う。

しかし、先に述べたように日本人の付き合い志向は明らかに、以前とは大きく変わってきている。細やかな配慮が必要とされるような人間関係の場は、それに伴って減少していくであろう。「自分は優秀だ」とか「自分が

こんなに努力し苦勞したのだから、成果があったのだ」とウチでは思っている、ソトに向かっては謙遜し卑下してみせるのが、日本的な言語行動であった。但し、それには条件がついている。「優秀だということを認めてもらいたい」「努力を正当に評価してもらいたい」という隠された発信者の本心を、受信者が「察する」ということが、その条件である。「察して」もらえなければ、謙遜も卑下も全く無意味どころか、発信者の意図したことと違ったことが受信されることになってしまう。

Ⅱ-1の「いつもお世話…」例を取ってみても近頃は、この言葉が当然期待される場面で発話されないケースにしばしば出くわすことがある。

担任：「もしもし、〇〇さんのお宅ですか。

私、〇〇さんのクラス担任の△△と申しますが、〇〇さんいらっしゃいますか。

母親：「…、はい。ちょっと、待ってね。〇

〇ちゃん、△△さんから電話！」

このような場面で以前なら、相手が担任の△△と名乗った時点で、ほぼ100%の日本人が「いつもお世話になっています」という言葉を儀礼的にでも、口にしたはずである。筆者の経験では、上例のような対応をするのは、比較的父親よりも母親に多いように思われる。電話の向こうの気配から察するに、親子の関係は悪くないようである。そうしてみると、このような対応をする親は、「配慮」がウチ(自分の娘)に対してのみ向けられていて、ソト(担任)には向ける必要がないと感じているということなのであろうか。

「アレ」を多用したⅢ-1の例に見られるような、過剰なまでの「配慮」や「察し」に基づいた会話スタイルは、年配者の間ではその価値が認められても、若者の間では疎んじられる傾向にあるのではないか。以前は日本人の誰でもがごく当たり前のこととして実行していたと思われる「察し」も、北出

(1993)が言うように、共感能力とともに読み取り能力を失いつつある若い世代には、もはや理解できないコミュニケーション・スタイルであるのかもしれない。

注

- 1) 因みに筆者の勤務校周辺の市町村を見ると、岐阜市及び羽島市では平成12年度から、各務原市では平成10年度から、市内のすべての小学校において一斉に実施されている。
- 2) 調査班は、1938年以前に生まれた人々を戦前・戦中世代、39年から58年までに生まれた人々を戦後世代、59年以降に生まれた人々を戦無世代と設定している。
- 3) D. C. バーンランド、西山千・佐野雅子訳、『日本人の表現構造』、サイマル出版会、1973、p.63.
- 4) 辻村明、『日本文化とコミュニケーション』、日本放送出版協会、昭和43年、p. 62
- 5) 『新明解国語辞典』第二版、金田一京助他編、三省堂。
- 6) 直塚玲子、『欧米人が沈黙するとき』大修館書店、1980、pp.69-70.
- 7) 小林純子・Jonathan R. Davis, A variety of American Cultures, 成美堂、1998、pp.61-2.
- 8) 中山治、『「ほかし」の心理』創元社、1988、p. 72.

参考文献

- NHK放送文化研究所、『現代日本人の意識構造』(第5版)日本放送出版協会、2000.
- 井上逸兵、『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂、1999.
- 鍋倉健悦(編著)、『日本人の異文化コミュニケーション』北樹出版、1990.
- 西田ひろ子、『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店、1989.
- 橋本満弘・石井敏(編)、『日本人のコミュニケーション』桐原書店、1993.
- 牧野成一、『ウチとソトの言語文化学』アルク、1996.
- 渡辺武信、『銀幕のインテリア』読売新聞社、1997.